新日本フィルメンバーと仲間たち

2025 年 8 月 17 日 14 時　可児市文化創造センター ala 小劇場

主催：新日本フィルメンバーと仲間たち
共催　公益財団法人可児市文化芸術振興財団

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）

ディヴェルティメント ニ長調 K. 136 (125a)より

I. Allegro

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1828）

ヴァイオリン、ヴィオラとチェロのためのセレナーデ ニ長調 作品８より

I. Marcia: Allegro
II. Adagio
V. Allegretto alla Polacca
VI. Thema con variazioni: Andante quasi allegretto
VII. Marcia: Allegro

（休憩 20 分）

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

弦楽四重奏曲 嬰ハ短調　作品 131

I. Adagio ma non troppo e molto espressivo
II. Allegro molto vivace
III. Allegro moderato
IV. Andante ma non troppo e molto cantabile – più mosso – Andante moderato e lusinghiero – Adagio – Allegretto – Adagio ma non troppo e semplice – Allegretto
V. Presto
VI. Adagio quasi un poco andante
VII. Allegro

ヴァイオリン：山本美樹子/三雲はるな　ヴィオラ：脇屋冴子　チェロ：長谷川彰子

曲目解説　　山本美樹子

モーツァルト《ディヴェルティメント ニ長調》 K. 136 (125a)より

作曲時期 ：1772 年頃（モーツァルト 16 歳）
出版/初演：1870 年/不明
作曲地　 ： ザルツブルグ

① 生き生きと（ニ長調、4/4）：ソナタ形式

ディヴェルティメント（嬉遊曲）は、イタリア語の“divertire”（楽しませる）を語源とし、ヨーロッパ貴族の食卓や余興の場のための音楽として、18 世紀から 19 世紀初頭に盛んに作曲された。明るい曲想で楽器編成・形式・楽章数は自由、モーツァルト始めヴィーン古典派の作曲家たちの作品は特によく知られている。

本作の書かれた時期には多岐に渡るジャンルで意欲的な試みがなされており、いずれにおいても若きモーツァルトの才気が存分に発揮される。ディヴェルティメントに不可欠のメヌエット楽章が置かれず、当初はタイトルも付されていなかったことを鑑みると、作曲者はここで気楽な娯楽音楽とは一線を画す芸術への道を模索し始めていたのかもしれない。四声が織り成す瑞々しいハーモニーからその心意気を感じて頂きたい。

ベートーヴェン《ヴァイオリン、ヴィオラとチェロのためのセレナーデニ長調》作品 8 より

作曲時期	：1796–97 年夏頃（ベートーヴェン 26 歳前後）
出版・初演	：1797 年
作曲地	：ヴィ―ン
献呈	：ヨハン・シュヴァンツァー

① 行進曲　生き生きと（ニ長調、4/4）：楽隊を恋人の家の窓辺へと誘う、闊達な入場のマーチ。
② ゆったりと（ニ長調、3/4）：行進曲から続けて奏されるヴァイオリン主導の緩徐楽章。
⑤ やや快速に、ポーランド風に（ヘ長調、3/4）：ポロネーズ（勇壮な舞曲）とヴィ―ン古典派の粋な融合。
⑥ 歩くように、アレグレットと同等の速さで（ニ長調、2/4）：主題と五つの変奏+コーダからなる変奏曲。
⑦ 行進曲　生き生きと（ニ長調、4/4）：第 1 曲の再現。退場のマーチで全曲を締めくくる。

1792 年、生誕地ボンからヴィーンに進出したベートーヴェンは、前年死去のモーツァルトからバトンを受け取り、本格的な作曲活動をスタートさせる。折しも、同地ではハイドン（1732-1809）の弦楽四重奏曲が大きな反響を呼んでいた。ベートーヴェンもそれに追随すべく室内楽領域へのアプローチを開始し、最初の四重奏曲（作品 18）創作の前段階として、五曲の弦楽三重奏曲（作品 3、8、9）を書き上げる。その二作目にあたる本作は発表当初から大人気を博し、ヨーロッパ各地で様々な編曲版が作られ、親しまれていった。

セレナーデ（小夜曲）は、「夕べに恋人のために野外で奏でる歌」に端を発し、18 世紀以降「多楽章形式の器楽合奏曲」として発展していく。古典派時代には屋外での儀礼や婚礼での演奏を想定し、両端楽章に楽師たちの入退場のための行進曲を置くのが通例となっていた。本作はそのスタイルを踏襲し、古典的かつ明快な楽曲構成、祝典的で華やかな曲調にもセレナーデらしさが表れるが、同時に本格室内楽作品として固有の品格と風格を漂わせる。生き生きとしたアンサンブルから立ち上がる各曲の多彩な表情、そこここに見え隠れする遊び心やウイットに、初期ベートーヴェンならではの魅力が再認識されよう。

L.v.ベートーヴェン《弦楽四重奏曲 嬰ハ短調》作品 131

作曲時期	：1825 年 12 月-26 年 5 月
出版/初演	：1827 年 6 月/28 年 6 月
作曲地	：ヴィ―ン
献呈	：シュトゥッターハイム男爵

① ゆったりとしかし遅すぎず非常に感情豊かに（嬰ハ短調、2/2）：形式と精神性が融合した厳格なフーガ。
② 生き生きととても活発に（ニ長調、6/8）：前楽章との対比が際立つ、軽快なロンド形式楽章。
③ 生き生きと中庸の速さで（ロ短調～変ロ長調、4/4）：レチタティーヴォ風の語りで橋渡しをする。
④ 歩くような速さでしかしあまり遅すぎず（イ長調、2/4）：主題と六つの変奏曲+コーダ。全変奏が主題と同じ調、楽節構造（16 小節）を保持しながら、移りゆく多様な感情を描き出す。

⑤　非常に速く（ホ長調、2/2）：三部形式のスケルツォ。めまぐるしい応酬の合間から諧謔が顔を覗かせる。
⑥　ゆったりと少し歩くように（嬰ト短調、3/4）：心の深奥に沈潜し、再び自身と対峙する瞑想的な楽章。
⑦　速く（嬰ハ短調、2/2）：ソナタ形式で劇的に作品を包括。嬰ハ長調和音の力強い終焉が深い余韻を残す。

1825年末、ガリツィン候の依頼による《弦楽四重奏曲》作品130/133（大フーガ）を書き上げたベートーヴェンは、純粋な内発的欲求に突き動かされ、新たな四重奏曲に本格着手する。遺された何百枚にもおよぶスケッチは、尽きせぬアイデアと幾通りもの構想が、周到な彫琢を経て最終稿へと収斂されたことを指し示す。ベートーヴェン自身が「最高の作品」と位置付けたこの作品の特質と聴きどころを挙げていきたい。

◎　楽章構造の革新性

ヴィーン古典派四重奏曲の楽章構造の基本型は「①速いソナタ形式、②/③歌曲形式またはソナタ形式による緩徐楽章 /メヌエットやスケルツォ、④ソナタ形式またはロンド形式」である。ここでは、「提示部－展開部－再現部－コーダ」という枠組みを用いて音楽を秩序立てるソナタ形式が楽曲形成の要となっていた。本作ではフーガを出発点に全7楽章が切れ目なく演奏され、その伝統概念が打ち崩される。四声体書法による緊密な展開、そこから生じる内的ダイナミズムなど、フーガ自体の独創性もさることながら、ここで特筆されるのは音楽の「連続性」である。変奏技法の粋が尽くされた④の長大な変奏曲を中心に、各楽章が影響を及ぼし合いながら起伏を形成してゆく様は、①内省と葛藤→②躍動→③予兆→④回想と成熟→⑤現実逃避→⑥黙想→⑦苦悩、格闘、そして受容へ、といった物語が一筆書きの音楽の中で展開されるかのようだ。

◎　潜在主題法による内なる統一

ベートーヴェン中期作の構造原理は、核動機（音楽の種）を反行・転回、縮小・拡大（発酵・熟成）させ、曲を有機的に構築・統一する「動機労作法」であった。それに対し後期作では、一見無関係のようで音程・リズム的に相関性のある動機や主題を異なる場面に配し、深層でそれらを結びつける「潜在主題法」が用いられる。本作では冒頭で、「苦痛の型」と呼ばれる半音音型を含んだ四音動機（Gis－His－Cis―A）が作品全体の基調を提示。この動機の諸要素が種としてすべての楽章に蒔かれることで、そこに内包される精神の核が聴き手の無意識下で共鳴し、全曲の統一が成し遂げられるのである。

◎　調の特殊性

嬰ハ短調の楽曲自体が希少であり、ベートーヴェンの作品中でも特別な存在感を放つ。半音階進行の多さからくる緊張感や不安定さ、光と影の交錯、崇高で超越的な響きなど、調自体が有する複雑な性格が曲の音調に資するところは大きいが、①主調→②ニ長調（長 2 度上行で浮上し気分を一新）③ロ短調→④イ長調（長2度下行で腰を据える）⑥嬰へ短調→⑦主調（精神的回帰）など各部の転調にもドラマの伏線が張り巡らされる。

その他、極端な強弱変化やピッツィカート（弦をはじく奏法）、スル・ポンティチェッロ（駒を弓で擦る奏法）による音響効果の模索など、大胆な技術実験も枚挙にいとまがない。ただ、時空を超えて人の心を揺さぶり続けてきたのは、それらの動力源となり得たもの、すなわち基幹を成す精神そのものであった。バッハを称揚しながらも古い形式や理論に拘泥することなくロマン主義の先鋒となり、さらにはそれをも飛び越えて比類なき孤高様式を打ち立てたベートーヴェン。その省察と超克の足跡を楽譜からすくい上げ、我々の音をもって再構築することで、今この場所でしか為し得ない音楽体験を皆様にお届けできればと願っている。

長谷川彰子（はせがわあきこ）チェロ

愛知県立芸術大学を首席で卒業。第７７回日本音楽コンクール第３位。２０１０年９月よりロームミュージックファンデーションより奨学金を受け渡独。ライプツィヒ音楽演劇大学修士課程を最高点で卒業。２０１３年東京芸術大学修士課程首席修了。　これまでに中島顕、天野武子、河野文昭、山崎伸子、ペーター・ヘルの各氏に師事。九州交響楽団チェロ首席奏者を経て、現在新日本フィルハーモニー交響楽団チェロ首席奏者を務める。

脇屋冴子（わきやさえこ）ヴィオラ

東京藝術大学を経て、同大学院修了。その後ウィーン国立音楽演劇大学にて研鑽を積む。YBP 国際音楽コンクール最高位。東京藝術大学在学中にモーニングコンサートに出演。また室内楽においてリゾナーレ室内楽アカデミーにて最優秀賞を受賞、松尾学術振興財団より奨学金を受ける。これまでにヴィオラを岸優子、大野かおる、川﨑和憲、ジークフリート・フューリンガーの各師に師事。2016 年より新日本フィルハーモニー交響楽団ヴィオラフォアシュピーラーを務める。

山本美樹子（やまもとみきこ）第１ヴァイオリン

東京藝術大学大学院室内楽科後期博士課程修了。リゾナーレ室内楽セミナーにて最優秀賞受賞。東京芸術大学とウィーン音楽演劇大学の共同プロジェクト「haydn total」に参加し、ハイドンの弦楽四重奏曲の録音を行う。岡山潔、ジェラール・プーレ、松原勝也の各氏に師事。東京藝術大学音楽学部・同付属高等学校・お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師を歴任。

三雲はるな（みくもはるな）第２ヴァイオリン

東京藝術大学卒業。同大学院修士課程室内楽科を首席で修了し、修了時に台東区長賞、大学院アカンサス音楽賞を受賞。スイス バーゼル音楽院修士課程及びに演奏家課程を最高点で修了。
オーケストラ研修生として、バーゼル交響楽団、チューリヒ　トーンハレ管弦楽団等にて研修を行う。沼田園子、松原勝也、玉井菜採、B. ドール、A. オプレアンの各氏に師事。現在ドイツ・マンハイム国立歌劇場管弦楽団正団員。

Ensemble Humoreske（アンサンブル・フモレスケ）

2009-2012 年、前身団体 Quartett Humoreske（クァルテット・フモレスケ）として、東京藝術大学音楽学部室内楽講座とウィーン音楽演劇大学ヨゼフ・ハイドン室内楽研究所による共同プロジェクト「haydn total」に参加し、ハイドンの弦楽四重奏曲の CD 録音を行う。リゾナーレ室内楽セミナー等において、岡山潔、服部芳子、山崎伸子各氏の薫陶を受けた。
2020 年、再始動。形態を一つに定めない変幻自在なアンサンブル団体として、古典から近現代までのデュオ/トリオ/クァルテットなど、多彩な作品を組み合わせたコンサートシリーズを企画・開催しながら、TAMA 音楽フォーラムへの出演、可児市文化芸術振興財団との共催事業など、各地で積極的に演奏活動を展開している。
なおフモレスケとは、「情緒と機知との幸せな融解」を意味するドイツ語 "Humor "（フモール）から転じたもので、多様な感情を音に込め、共有したいとの願いが込められている。